

第七回 幸福師匠！お一えん会（報告）

令和5年6月3日（土）に岐阜市神田町の喫茶店星時で「登龍亭幸福・旭堂鱗林二人会」が開かれました。「第七回幸福さんお一えんかい」は8人のメンバーが参加しました。

○今回の演目は、登龍亭幸福師匠の一席目は『一眼国（いちがんこく）』でした。

はじめに：江戸の隅田川には両国橋が架けられ、橋のたもとの両国広小路には芝居小屋、軽業小屋、見世物小屋、講釈場などが建ち並び、食べ物屋の屋台なども所狭しと建っていたようです。香具師（やし）や大道芸人などの活躍の場所でもあったようで、諸国66カ所をまわり歩き、写経を奉納する六十六部（ろくじゅうろくぶ）、略して六部（ろくぶ）と言う人が居たそうです。香具師や親方のところには、一晩の宿を借りた六部もおり、親方の方は、六部からなにか変わった話や特殊な人間でも居れば、いや、化物（ばけもの）ならなおさら良いので、とにかく捕まえて見世物にし、金もうけの種にしようとしたのが話の始まりです。

あらすじ：★親方が一儲けしようと小屋に新しい出し物は何かと考えめぐねていました。

ある六部（ろくぶ）がやって来た。翌朝、六部に親方が、

親方：「私ヤね、両国に小屋を持っているんだがね。この頃じゃネタも尽きた。最近のお客も利口になって、軟な出し物じゃ引かかかってこなくなった。お前さんは、年がら年中旅から旅をなさっているから、珍しい話も聞いたらろうし、また、見もしたろうね、ひとつ話を聞かせてくれないか」と持ちかけた。

六部：「そんな話はとんとない」と返す。

親方：がっかりした親方は「裏に回って、鮭茶漬でも一膳食べて行きな」と、一宿の恩をたてにさらにしつこく聞くと、ようやく、

六部：「まア、つまらないことですが……、ひょっと思い出したのがございます。恐ろしい目に会った話で、これを置土産にしていこうと存じますが…」と語り出した。

「よくは覚えていないが、江戸から北の方角、100里あまりも行ったところに、大きな原があり人家はない、日も暮れかかったので、野宿でもしなければならぬかと思っていると、大きな榎（えのき）の傍で、子供の女の子に呼び止められた」

女の子：「おじさん、おじさん」

六部：呼ぶ声に振り返って見ると、五つか六つの女の子が立っている。顔を見るとノッペラボウで、額のところに眼が一つ…。仰天して夢中で駆け出し、ようやく里に出た、という話をした。

親方：これを生け捕ってきて見世物小屋に出したら、江戸中の人気になり、大儲けできると考えた。「もっと良いもの食わしてやりゃ良かった」、親方は喜んで、六部に金を包んで出発させ、さっそく自分もその日のうちに旅支度をして家を出た。北へ北へと歩いたが、なにも出ない。そのうちに日も暮れてきた。さてさて、これは六部のやつに一杯食わされたかと悔しがって、四、五丁も歩いたところで教えられた大きな原の榎のところに出た。話の通り木の根に座りプカリプカリと煙草をふかしていると、後ろの方で「おじさん、おじさん」という声。「しめた、こいつだ」と思って振り返ると、案の定、ノッペラボウで目が一つ。これは見世物にすればもうかると欲心に駆られて、ものも言わずに飛びかかってひっ捕まえると、子供を小脇に抱え、森の外に向かって一目散。

女の子：「キヤア」と声を上げたからたまらない。

親方：野原のどこからかたくさん大人の大人が出てきて寄ってたかってふん縛られ、突き出された先が代官所だった。お白洲に引き出された。ひょいと見上げると、お代官も役人もみんな一つ目。自分を捕まえた百姓もみんな残らず額に一つ目である。

代官：「こりゃ、人さらい。かどわかしの罪は重いぞ、面を上げい！」。ここで、代官の方もびっくりだ!!。「やや、こやつ……!!、おのおの方ごらんなされ。こやつ目が二つある。こりゃ怪物（ばけもの）だ」。「調べは後まわしだ。早速に見世物に出せ」

おまけに：化け物を見世物にして、金儲けのタネとすることは、さすがに今日の社会では考えられない事だが、つい50年くらい前には「奇人変人」なんて言うテレビ番組もあった。江戸時代『一眼国』を演じていた頃は、珍奇な存在として異者を観るというに過ぎなかったのかも知れない。噺は文化文政頃に作られたもののようで、この頃には、「大入道」「三本足の女」「首なし」「ろくろく首」などが盛んに高座で演じられていたという。科学と合理主義で固められたような今日では考えも及ばず、新奇の眼（まなこ）と好奇心で、江戸時代の住人衆は接したことだろう思う。



○登龍亭幸福師匠の二席目は『禁酒番屋（きんしゅばんや）』でした。

はじめに：ある藩で、酒を飲みすぎた藩士同士がささいな事から喧嘩を始めて刃傷沙汰を起こしてしまった。それを重くみた殿様は藩中の者に対して禁酒命令を出した。酒好きの家中は驚いたが、それよりも衝撃を受けたのは出入りの酒屋だった。しかし禁酒も長くは続かないもの。しばらくすると外で一杯引っかけから門を潜る者が出てくるようになってしまった。そんな事が殿様の耳に入ったら一大事なので重役達は門のところに番屋をこしらえ藩士が酒気を帯びてないか、商人が酒を持ってないかを厳しくチェックするようになった。いつしかそれが「禁酒番屋」と呼ばれるようになった。

あらすじ：★家中一の酒好きの近藤は今日も町の酒屋で酒を飲んでた。しかしこれ以上飲んだら禁酒番屋でバレてしまう。まだ飲み足りない近藤は酒屋の店主に夕刻までに拙者

の小屋に一升届けてくれと注文を出す。店主は、番屋で調べられるので出来ないと断るも、金に糸目はつけないから工夫して持ってこいと、店を後にしてしまった。

さて、一番丁稚が、横町の駄菓子屋に事情を話し、カステラの一番大きい折を買い、その中身を取り出し五合徳利を二本詰め替えてしまおう提案した。店主もカステラのご進物と言え番屋を通れるだろうと近藤様に届ける事にした。しかし上手くはいかないもので、箱の中身を見られてしまう。徳利の中身は新発売の水カステラだと弁解をしたが、軽いカステラを重そうに箱に戻したため、怪しいと言う事になり取り調べだと言って一升全て飲まれてしまった。

「偽り者め！出ていけ！」

次の二番丁稚は油だと言って通ろう、今度こそは近藤様に届けると試みるも、徳利の口元は油まみれだった。徳利の栓を抜くとやはり見破られ一升飲まれてしまった。

「偽り者め！出ていけ！」

叱られた上に、タダで二升も飲まれて腹の虫が収まらない店主。こうなれば仕返しをと三番丁稚が、小便を小便だと言って持って行く事にした。お女中の小便までたっぷり詰めた。案の定、番屋で止められてしまったが、ここまで想定内。これは何かと言われ、小便だと言うと。役人は最初がカステラ、次は油、そして今度は小便か……!!。

「控えておれ、取り調べる！」

うむ……!!、今度は爛にしてきたな、とか性の悪い泡が立っている、とかブツブツ言いながら飲もうとしたが。臭いが違う……!!、

「こ、これは小便ではないか！けしからん……!!」

『ですから、初めから小便だとお断りを・・・』

(初心者でも分かる！あらずじ辞典を参照)

おまけに：いくら殿様が見せしめで禁酒にしても「吞兵衛」は何処にでも居るものだ。

「余の所に一升持って参れ、金に糸目はつけれぬ」と言われ番屋を通ろうとする店主と丁稚、難問に挑む知恵比べとなる。最後は正直者が勝つと嘸しだが、実際はハードルを越えようとする一休さんの楽しみの方が強い内容でした。今回も、chatGPTに意見を求めてみました。頓珍漢な返事しか返って来ません。どうもAIに頼るのは気を付けた方が良く、AIの限界を知る機会にもなっています。

○旭堂鱗林師匠の藤井聡太シリーズ講談『藤井聡太の将棋一番勝負』では、今回は名人争奪戦でした。

藤井聡太六冠(20)は5月31日、6月1日の両日、長野県高山村で指された第81期名人戦七番勝負第5局で渡辺明名人(39)を破り、4勝1敗で名人のタイトルを奪取し七冠を達成しました。七冠は羽生善治九段(52)に次いで史上2人目の快挙で、併せ持つ竜王・王位・叡王・棋王・王将・棋聖と合わせ、羽生善治九段(52)に続き史上2人目の七冠を最年少で達成しました。20歳10カ月での名人獲得は、谷川浩司17世名人(61)の21歳2ヶ月の記録を抜く最年少記録となりました。全八冠独占まで残るタイトルは王座のみとなりました。最年少で名人のタイトルを奪取し藤井七冠は終局後の記者会見で「現時点では(八冠は)まだまだだと思っているが、目指せること自体光栄だと思う。そこに近づけるように頑張りたい」と話しています。一方で、「瀬戸市の藤井聡太お一えん勝手連(鱗



林大使)」は、藤井八冠が誕生するまで“気が気でない”と、お年寄り連中の健康寿命を伸ばす効果を発揮しています。

○登龍亭幸吉さんは行商人の売り声についての小ネタでした。

あらすじ：★与太郎は魚の行商に挑むことになり、売り声を叫びながら長屋へ商いに出かけた。「金魚売り」と出くわし、「ゆったり泳ぐ金魚」と「活きのいいイワシ」、売り声を逆にすれば滑稽になり、まったく売れない。今度はふるい屋が「ふるいー、ふるいー」と声を出していると、「俺は今イワシを売っている。イワシは新鮮なのが売りなのに、後ろから『古い』などと言われたら商売にさわる」と文句をつけ、口論となる。そこへ荒金屋（＝金属回収業者）が現れ、「わたしが仲裁しましょう」と、3人で決まった順に声を出すことを提案する。魚屋が「おー、イワシ、イワシイワシ」。ふるい屋が「ふるいー、ふるいー」。そのあと、荒金屋が「古金エ、ふるかねエ」（＝「ふるかねエ」は「古くはない」と言う意の江戸言葉）

○次回の「幸福師匠おーえん会」の紹介。

落語や講談といった日本の伝統話芸を楽しむため、岐阜東高等学校同窓会では、「幸福師匠おーえん会」を支援しております。岐阜市神田の喫茶店「星時（ほしどき）」で開かれている「二人会」にお邪魔をし、伝統話芸を広めたいと応援しています。老若男女どなたでも参加でき、日本の伝統話芸の面白さや意味の深さを知る機会としております。

次回は令和5年9月2日土曜日7時から星時で開催されます。「幸福師匠おーえん会」ではまとめて席をお取りしておりますので、是非、生（なま）の落語・講談を聴きたいと思われる方はご連絡下さい。

幸福師匠おーえん会 代表 坂井至通（12期卒）

**登龍亭幸福
旭堂鱗林
二人会**

登龍亭幸福 (とうりゅうてい こうふく)
旭堂鱗林 (きょどうりんりん)

～日程～
3月11日 6月3日 9月2日 12月2日
土曜日の夜開催！！

開場 18:30 開演 19:00
木戸銭 2,000円(ワンドリンク付き)

ほしどき
喫茶・星時
(岐阜市神田町3-3 加藤石原ビル2階)

ご予約・お問い合わせ 080-1602-3562(幸福)
higusan@gmail.com(星時)

主催 登龍亭一門会

トントントントン 寄席が始まるよ～

大須演芸場(中区)の6月定席寄席が1日、7日曜の日程で始まった。演芸場近くでは劇場に合わせ、前座の登龍亭幸吉さん(42)が「一番太鼓」を響かせ、大須商店街を行き交う買い物客らの来場を誘っている。

幸吉さんは開演30分ほど前から、演芸場の前や近くの大須観音通り商店街で「トントントントン」と10分ほど和太鼓を響かせている。周囲に鳴り響く音に足を止める買い

物客らは少なくないという。矢輪通也支配人によると一遊太鼓は上方寄席や地蔵寄席で見られ、大須演芸場では5月に始まった。矢輪支配人は、観客の動員数がコロナ前に近づきつつあるとして「さらに観客が増えてほしい」と期待した。

定席寄席の開演は午前11時と午後2時半で、今月のトリは落語家の笑福亭学光さん(69)ら。木戸銭は前席2700円、当日3000円。一番太鼓は、雨天時は響かせない。豊大須演芸場＝0577(62)9203 (成田高盛)

大須演芸場 二番太鼓 開演前に響く

一番太鼓をたたく登龍亭幸吉さん＝中区の大須演芸場で